

ラフカディオ・ハーン in 2022

中村康一氏（第16期・昭和40年卒）

コロナ第8波の中での年末年始に思うところ。去年はどんな年だったのだろうか？

相変わらずコロナ自粛が続き、北高サッカー部だった私はカタールWCでの寝不足の日々を過ごしていたが、やっと落ち着き.....

ふと気付いたのだが、去年はハーンに関する新刊書が二冊出版された。二つとも著者は女性である。

モニク・トゥルン「かくも甘き果実」（4月、集英社）

田淵久美子「ヘルンとセツ」（8月、NHK出版）



（写真 ①単行本二冊の表紙）

さらに、新聞でも.....

「文人の武蔵野（小泉八雲）」（読売新聞武蔵野版、3月15日～18日連載）

「よみほっと-旅を旅して：隠岐-ラフカディオ・ハーン「知られぬ日本の面影」

（読売新聞日曜版、9月11日）



（写真② 新聞記事）

おりしも、昨年は松本清張（1909-1992）没後 30 年。様々な「清張本」が刊行され、TV でもドラマ再放送や新作ドラマが続いた。ハーンが没したのは 1904 年（明治 37 年）。今年は無後 118 年である。

100 年以上前にこの世を去った作家と 2022 年に何か関りがあるのだろうか？

モニク・トゥルンはサイゴン生まれのベトナム人、6 歳のときに戦争難民としてアメリカに移住。イエール大学、コロンビア大学卒の才媛。上記の書でジョン・ガードナー小説賞を受賞。他にも様々な賞を受賞している注目の作家である。

田淵久美子はお存じの方も多いと思うが、益田市出身の脚本家、作家。NHK大河ドラマ「篤姫」の脚本でも広く名を知られている。

ハーンと言えは、耳なし芳一、雪おんな等の怪談が真っ先に頭に浮かぶ。だが、この二冊は放浪の旅を続け、最後に日本で「小泉八雲」となつて骨をうずめた男の人生に深く関わった三人の女性の物語である。ハーンは放浪の人であり多面的な作家なのである。

モニクが描くのは……ハーンを捨てた実母「カシマチ」、ハーンの最初の妻で解放奴隷の「フォーリー」、そして、日本で結婚した 2 番目の妻「小泉セツ」。

ギリシャで支配階級の家庭に生まれたカシマチは、移住先のアイルランドでハーンを捨て帰国。一人残された 16 歳のハーンは裕福な叔母の世話になりながらカトリック学校に進んだ。しかし、その学校での事故で左目を失い、叔母も没落し、退学を余儀なくされる。19 歳のハーンは 1869 年、絶望の果てに単身でアメリカ行きを決意。一文無し、不自由な目、知り合いもいなく、ニューヨークを彷徨うことになる。シンシナティで結婚したフォーリーと別れ、仏領西インド諸島に一年半あまり滞在。そして、1890 年（明治 23 年）4 月 4 日、横浜港に到着。放浪の最後の地となる日本に上陸したのである。そして、その年の 9 月に私たちの母校、当時の「島根県尋常中学校」の英語教師となり、セツという伴侶を得て日本人、小泉八雲となる。

モニクはベトナム戦争で幼くして故郷を追われ、アメリカに渡った。放浪とは言わないが生まれ故郷を捨てざるを得なかった。このことが放浪の人、ハーンの生涯に関心を持たせたのだろうか？ モニクは 2015 年に小泉八雲記念館を訪問している。彼女はこの本の謝辞の中で ” ついに私の納得のいく小泉セツに「出会う」ことができたのです。” と記している。（注 1）

田淵久美子は、「セツ」に焦点を当てる。セツは武家の娘として慶応4年（明治元年）に生まれる。18歳で最初の結婚をするが夫は失踪。明治維新後の実家の没落の果て、縁あってハーンの身の回りの世話をする職に就いたセツ。二人の出会い、セツの語る怪談への興味、そして結婚にいたるまでの松江での生活が描かれている。会話の大半は「出雲弁」となっている。ただ、田淵は石見の生まれ、多分、出雲弁は身近ではなかったと思う。私が子供の頃しゃべっていた”ズーズー弁”とはほんの少しだけニュアンスが異なっているように感じた。ただ、これは大した事ではない。子どもの頃に遊び回った松江の街並みを目に浮かべながら、あっという間に読み終えた。私の実家からは、ヘルン旧居（小泉八雲旧居）も普門院もそれほど離れてはいない。

ハーンは怪談だけの作家ではない。放浪の人。フランス語も堪能なジャーナリスト、新聞記者、紀行作家、東大と早稲田大では英文学の講師も勤めている。なんと、東大でのハーンの後任は夏目金之助（夏目漱石）である。余談だが、八雲も漱石も南池袋の雑司ヶ谷霊園に眠っている。（注2）

ハーンの本を思い付くままにめくったら、昔を思い出した……………



（写真③ 書棚）

北高の英語の授業のサイドリーダー（高校生向けにリライトしたもの）でハーンを読んだ。今でもハッキリ覚えているのは Fumon-in。「神々の国の首都」の中の小豆磨橋（あずきとぎばし）に出てくる。普門院は子供の頃、よく魚釣りに行った寺である。境内が北堀川に面しており、フナ釣りに人気だった。私が英語に興味を抱き、英語を使う仕事に就いたのは、北高時代のこのリーダーがきっかけだと思う。

それから、「狐」という話に出てくる石橋町のお稲荷さんの話。

“松江のあるとてももの淋しい、よそ者で道に迷う心配さえなければ、通りたくない道筋の一つであるが、そこに「地行場の稲荷」または「子ども稲荷」と呼ばれている社が立っている。（注3）

子ども稲荷は私の実家の近くで子供の遊び場だった。お祭りには露店が並び、夜店もにぎやかだった。鳥居前の広場に自転車でやって来る紙芝居屋も楽しみだった。見物料として買った水あめを割りばしでこねて、白くなってから舐めたのを覚えている。昭和30年（1955年）頃の話である。

ハーンは、田原神社（通称、春日神社）を散歩していたとの記述を目にすることがよくある。（注4）この神社は松江北高（私の時代は松江一中だった。通称赤山）の裏手、奥谷町にある。ただ、私はハーン自身の著作の中でこのことを目にしたことがない。もし、本当にハーンが田原神社を訪れていたなら、正面の鳥居をくぐり抜けてすぐその両脇にある子連れ獅子像を見たはずである。この獅子像は私の先祖の手になるものだ。私の実家は幕末から続いた石屋だった（祖父の代、1950年代後半に廃業）。実家に保存してあった当時の下絵を見ると、嘉永三年（1850年）、石屋乙右衛門とある。偶然だが、ハーンは1850年生まれなので、この獅子と同年となる。来待石で造られたこの獅子像（阿と吽の2像）は現存している。尚、この下絵は掛け軸にしてあり、北高の同期生、地質学者の野崎保君の仲介で松江市の来待ストーン・ミュージアムに寄贈した。

ハーンの本を手取る度に、子供の頃の遊び場やお祭りを懐かしく思い出す。普門院、ヘルン旧居、塩見縄手、子ども稲荷、春日神社、大橋川等々、、、
歳を重ねたお陰なのだろうか？



（写真④ 下絵：掛け軸）



（写真⑤ 田原神社の子連れ獅子：阿の像）

ハーンと 2022 年の関りは何も浮かんで来ない。

モニクスの原書（英語）の出版は 2019 年。翻訳版と田淵の本の出版が 2022 年。この二冊を続けて読んだことが、本文を書くきっかけになったのは確かである。ハーンに関する新刊本が没後 100 年を超えて出版されるのには何があるのだろうか。

ラフカディオ・ハーンへの興味がますます深まった。 （完）

（追記）

市報松江（2014 年 2 月号）に拙文「新宿、ハーン、松江」を掲載して頂いた。

都内にもハーンにゆかりの所がいくつかある。（注 5）

（注 1）I “met” at the Lafcadio Hearn Memorial Museum a Koizumi Setsu who, at last, made perfect sense to me. （原文のまま）

（注 2）池田雅之（編訳）「小泉八雲東大講義録」（角川ソフィア文庫）

（注 3）平川祐弘（編）「神々の国の首都：狐/第 13 章」（講談社学術文庫）

地行場（じぎょうば）町とは土塁の町という意味である。

それは沼を埋めた土地にある。（原注）

*私の親たちは子ども稲荷のことを地行場と言っていた。（筆者注）

（注 4）田原神社は松江市奥谷町に鎮座する神社～（中略）～小泉八雲が好んで訪れていた。

（Wikipedia より）

*「春日さん」と呼んでいた。子供の頃、親しみを込めて神社を”さん”と呼んでいた。天神さんにお参りする、武内さんのお祭り等（筆者注）

（注 5）市報松江 平成 26 年 2 月号（city.matsue.shimane.jp）

◆随筆「新宿、ハーン、松江」（東京双松会 HP 令和以前/5. 自由投稿）